

## 幼児をもつ両親の養育態度

猪野郁子\*・高橋 巧\*\*・寺津千賀\*\*\*・星野 泉\*\*\*\*

Ikuko INO, Takumi TAKAHASHI, Tika TERATSU and Izumi HOSHINO  
Studies on the Parents Rearing Attitude in Preschool Children

[キーワード：養育態度，受容的，統制的，責任回避的]

### 1 はじめに

止まらない少子化に対して、様々な対策がなされている。まさに至れり尽くせりの手が子育てに指し伸ばされているといってもよい。しかし、母親達の育児負担感や弱みならず、父親（夫）への不満も大きく、虐待される子どもの数は増えている。

学校では、集団行動ができない子どもやすぐに「きれる」子どもが増加し、いじめや暴力は減少せず、学級崩壊は小学校1年生に及んでいる。教師は、さらなる指導力を要求され、学業よりもまず「しつけ」ることから始めねばならない。

子どもたちが変わってきているのではないか、甘やかされて育てられているのではないか、家庭の教育力はさらに低下しているのではないかと問われる。総理府が行った「青少年の非行等問題行動に関する世論調査」によると<sup>(1)</sup>、昭和58年に比べ平成10年では、今の子どもは「忍耐力がない」「自己中心的」「自分の感情をコントロールできない」「既範意識に欠ける」とする者の割合が増加している。また、その背景の問題として、「子どもを甘やかすすぎ」「子どもとの触れあいが少ない」とする者の割合も増加している。ここで注目されるのは、「しつけは不十分である」とする者が昭和58年より減少していることである。しつけは十分にしているのだけど、一方で甘やかしているために、子どもたちに既範意識を十分に育てていないということであろう。

母親達のいや父親達の多くは、子どもの育ちに真剣に取り組んでいると自負しており、確かに真剣に取り組んでいる。しかし、過保護や過干渉といわれるように、真

剣に取り組んでいるその形に問題があるのかもしれない。

森下は、「幼児期の自己抑制と思いやり・攻撃性、親子関係との関連」において<sup>(2)</sup>、男児の場合、親の受容的態度が中年児の自己抑制や自己主張の発達にプラスの影響を与え、女児では、親の統制や力中心の養育態度が自己抑制と自己主張にマイナスの影響を与える可能性が高いと報告している。また、戸ヶ崎・坂野<sup>(3)</sup>は、母親の拒否的な態度が児童の不適切な行動モデルになっていると示唆している。養育態度はしつけスタイルとも言えるが、小林は、親のしつけスタイルと子どものコミュニケーションスタイルとの関係を見た研究で<sup>(4)</sup>、受容的な中にもルールを守るようなしつけをすると、子どもは周りに積極的になり、厳格なしつけを受けるとわがままなコミュニケーションスタイルを身につけると報告している。

このように、親の子どもに向かう態度（養育態度）によって、子どもの性格や行動に影響を与えることは、多くの研究が証明している。日常的には具体的なしつけを通して、親の態度は常時子どもに示されることから、その影響は大きいといわざるを得ない。

親の子に向かう態度を測定する尺度は、サイモンズ(Symonds, P. M)によって「受容-拒否」「支配-服従」という2つの軸（2次元）が提案され、これを基本にして、多くの研究者が最適な尺度を構築しようと努力をしてきた<sup>(5,6)</sup>。

その中の一人である鈴木ら<sup>(7)</sup>は、この2次元を基に、約1,000人近い対象者からのデータを因子分析した結果、従来の「愛情」次元に相当する「受容」と「子ども中心主義」が一つになった「受容的子ども中心的関わり」尺度、「統制」次元に相当する「統制」と「敵意の含ま

\* 島根大学教育学部家政教育研究室

\*\* 松江市立城北幼稚園常勤講師

\*\*\* 松江市立公民館職員

\*\*\*\* 社会福祉法人しらゆり会職員

れた統制」を一つにした「統制的関わり」尺度 (=統制しないという事実を内容としている)、従来「統制」に含まれていた「一貫性のないしつけ」や「ルーズなしつけ」からなる「責任回避的関わり」尺度の3次元の因子を得ている。

少子化・核家族化等によって親世代自身がコミュニケーションのみならず全般的に人間関係を作ることが下手になってきていることを考えあわせると、子どもへの態度=養育態度は、より過保護や過干渉あるいは放任になる傾向に向かっているのではないかと推察される。

そこで本論では、幼児をもつ親を対象に、親の養育態度と子どもの社会性の発達や親子間の心理的距離を明らかにすることを目的とした著者らの研究から、現代の若い親の養育態度を鈴木らの尺度を用いて明らかにする。

## 2 対象及び方法

松江市と平田市の私立幼稚園3園に通う幼児の保護者を対象とした。409組の保護者に配布され、307組から回収を見た。回収率は75.1%であった。父親と母親への質問紙を組として封筒に入れて配布回収を行った。ひとり親家庭はどちらか一方のみが回収されたが、それらは今回の分析から省いている。

松江市内の幼稚園と平田市内の幼稚園を対象としたのは、幅広い層から資料を得るためである。

質問紙を用いて調査がなされた。

質問項目は、養育態度を見る30項目(3尺度各10項目、鈴木らによる)、具体的場面(満員電車の中・お店の中・両手がふさがっている時・食事場面)での対応とその時の心理的距離を問う項目、母性や父性を問う項目等に対象者の属性を問う項目から成り立っている。

得られたデータは、SPSSパッケージを用いて統計処理を行った。調査は、'99年10月に実施された。

## 3 結果と考察

### 1) 養育態度

表1 父親・母親の養育態度

	受容的・子ども 中心的関わり尺度			統制的関わり尺度			責任回避的関わり尺度		
	全体 $\bar{X} \pm sd$	男子 $\bar{X} \pm sd$	女子 $\bar{X} \pm sd$	全体 $\bar{X} \pm sd$	男子 $\bar{X} \pm sd$	女子 $\bar{X} \pm sd$	全体 $\bar{X} \pm sd$	男子 $\bar{X} \pm sd$	女子 $\bar{X} \pm sd$
父親	38.53±5.31	38.12±5.21	38.96±5.34	27.28±4.90	27.46±4.89	27.24±4.79	24.72±5.48	24.37±5.22	25.17±5.68
母親	40.35±4.38	40.82±4.37	39.75±4.38	27.98±4.46	27.96±4.38	27.12±4.48	25.00±5.15	25.28±5.26	24.75±4.78

\* $p < 0.05$       \*\*\*  $P < 0.000$

受容的子ども中心的関わり尺度・統制的関わり尺度・責任回避的関わり尺度を構成する各10項目計30項目について、「確かにそうだ」から「全くそうでない」の5段階で評価されたものに5~1点を与え、各尺度別に得点を算出し、対象者の平均と標準偏差を算出した。

受容的子ども中心的関わり尺度は、得点が高い方がより子どもを受け入れている、愛情をもって接していることを示す。統制的関わり尺度では、得点が高いと子どもを自分の思い通りにしたいということである。責任回避的関わり尺度では、得点が高いと一貫したしつけや統制的仕方に一貫性がないあるいは統制できないことを示している。

表1は、父親・母親別に各尺度得点を見たものである。

父親も母親も、3尺度の中では、「受容的子ども中心的関わり尺度」が一番高く、ついで「統制的」「責任回避的」となっている。つまり、両親とも子どもに対して、愛情を持って養育しており、「統制的関わり尺度」と「責任回避的関わり尺度」では、得点がやや中間に位置しているところから、統制しすぎることなく、一貫性に欠けるといってもいい養育態度をとっていると言える。

両親間では、父親よりも母親の方がより受容的であり、その母親は、女兒より男児に受容的であることが明らかである。

子どもの出生順位によって親の養育態度に違いがあるかみたものが表2である。一人っ子の父親は、末子の父親より「受容的子ども中心的関わり尺度」が有意に高い。母親は、統制的関わりが、一人っ子や長子に対しては中間子や末子よりも有意に低い得点を示したことから、反対に長子には責任回避的関わりが中間子や末子よりも有意に高いことから、長子に対して他の子より統制的な関わりをしていないがしつけの一貫性には欠けることが明らかになった。

家族構成別、父親母親それぞれの年齢別には違いが見られなかった。

このように、親の養育態度は、おおむね「愛情」にあふれた態度をとっているが、母親は男児に、父親は一人っ子にその傾向が強く、また、母親は一人っ子や長子に

表2 子どもの出生順位別養育態度

	受容的子ども中心的関わり尺度		統制的関わり尺度		責任回避的関わり尺度	
	父親 $\bar{X} \pm sd$	母親 $\bar{X} \pm sd$	父親 $\bar{X} \pm sd$	母親 $\bar{X} \pm sd$	父親 $\bar{X} \pm sd$	母親 $\bar{X} \pm sd$
一人っ子	40.53±5.00	40.45±4.74	26.94±4.51	26.15±5.15	25.39±5.67	24.50±5.76
長子	38.88±4.84	40.79±4.33	27.38±5.06	27.70±4.28	24.77±5.63	26.23±4.80
中間子	38.37±5.72	39.18±5.12	27.00±5.82	29.81±4.04	24.47±6.36	24.06±4.71
末子	37.66±5.69	40.11±4.13	27.66±4.50	28.50±4.16	24.89±4.99	23.96±4.80

\* P<0.05      \*\* P<0.01      \*\*\* P<0.001

表3 具体的状況への対処

		実数 (%)				$\chi^2$ 検定
		父親	残差	母親	残差	
満員電車やバスの中で座りたいと大声で駄々をこねるとき	a 「今は満員でしょ！」 b 「強いから立ってられるよね」 c 「座りたいね。でも座れないから立ってようね」 d. e 知らない振りをする・その他	41(15) 69(25) 119(45) 45(17)		45(15) 55(19) 147(50) 48(16)		
スーパーマーケットやお店で「買って、買って」と大騒ぎをするとき	a 「買いません」 b 「他の物で我慢しようね」 c 仕方がないので買ってやる d. e 知らない振りをする・その他	116( 42) 38( 14) 52( 19) 69( 26)		128(43) 57(19) 28( 9) 85(29)	0.2 1.7* 3.3** 0.9	$\chi^2=12.34$ df=3 p<0.006
両手がふさがっているのに「だっこ」と言って、どうしても聞かないとき	a 「荷物が邪魔でだっこできない」 b 荷物をおいて一度だっこする c 「がまんしなさい」 d. e 知らない振りをする・その他	57(21) 101(37) 76(28) 41(15)	0.3 3.0 **	81(27) 106(36) 51(17) 59(20)	1.8* 1.6	$\chi^2=11.67$ df=3 p<0.009
何度言っても、席を立ったり遊んだりして、ご飯をなかなか食べないとき	a 「食べなくともいいから」と言って片づける b 「早く食べなさい」 c 食べなくなったら食べなくともよい。気分的なものだと思う d. e 放っておく・その他	26( 9) 165(60) 38(14) 47(17)	1.3 1.5 0.1	56(19) 161(55) 29(10) 49(17)	3.3**	$\chi^2=11.65$ df=3 p.0.009

\* P<0.05      \*\* P<0.01      \*\*\* P<0.001

対して、自分の言いなりにする傾向があり、また、長子には一貫性を持ちにくいつまり育てる過程で迷いながら育てていることがうかがえる。

2) 具体的な状況での態度

そこで、幼児期によく見かける親を困らせる場面に出会ったときに、具体的にどのような態度をとるのかを見た。

幼児を持つ保護者達の生の声が掲載されている雑誌から、具体的な4場面を選び、これらに遭遇したときに、どのような態度をとるのかそれぞれに5つの解答肢を用意した。次がその具体的な場面と5つの解答肢である。

- ①場面：満員電車やバスの中で、子どもが「座りたい」と大声で駄々をこねる時
- a. 「今は満員でしょ」

- b. 「強いから立ってられるね」  
c. 「座りたいね。でも座れないから立ってようね」  
d. 知らない振りをする  
e. その他 (
- ②場面：スーパーマーケットやお店で、「買って、買って」と大騒ぎされたとき
- a. 「買いません」  
b. 「他のもので我慢しようね」  
c. 仕方がないので買ってやる  
d. 知らない振りをする  
e. その他 (
- ③場面：両手がふさがっているのに、「だっこ」と言って、どうしても聞かない時
- a. 「荷物が邪魔でだっこできない」

- b. 荷物を置いて、一度だけだっこする
  - c. 「がまんしなさい」
  - d. 知らない振りをする
  - e. その他（
- ④場面：何度言っても、席を立ったり遊んだりして、ご飯をなかなか食べない時
- a. 「食べなくてもいいから」と言って、片づける
  - b. 「早く食べなさい」
  - c. 食べたくなかったら食べなくてもよい。気分的なものだと思う
  - d. 放っておく
  - e. その他（

結果を表3に示す。両者間に違いが見られる場合には何処に見られるかを見るために残差分析を行った。

満員電車内での対処については、父親母親とも子どもの気持ちを受け入れる態度をとる者が半数近くを占めている。また、両親間では違いは見られなかった。

お店での対処については、双方とも「買わない」という強い態度を示す者が半数近くいるが、父親に「仕方がないので買ってやる」者が2割いるのに対して、母親は、「他の物で我慢させる」者が2割とここで両者間に差異が見られる。

両手がふさがっている時の対処については、父親が「がまんしなさい」と我慢させるのに対し、同じ我慢させるにも母親は、「荷物が邪魔でだっこはできない」と言う態度をとっている。

食事場面での対応については、母親は食べなくともよいと片づけてしまう態度をとっているが、父親は特徴的な態度をとっていない。食事場面では、どこかに母親の役割とする意識が父親の中にあるからではなかろうか。

一般的に、父親も母親も子どもの心境に理解ある・受け入れる態度を示している。両手がふさがった場面や食事場面での、子どもの気持ちも分かるが親の状況も分かって欲しいという親の心情も読みとれる。また、親が困らされる場面（例えば、お店）では、父親の方が子どもに甘いことがみてとれる。

### 3) 養育態度と具体的場面での対処の仕方との関係

各場面での解答の選択が養育態度と関連があるのかをみた。具体的な3つの解答肢を選んだ者の養育態度を見たのが表4である。

この表から、一般的に、子どもの心を受け入れるような態度をとる父親・母親(満員電車の中の「座りたいね、」の父親・母親、両手がふさがっている時の「一度だっこしてやる」父親や母親など)は、やはり受容的子ども中

心的関わり尺度が有意に高く、自分の決めたことは守るという態度をとる場合(お店で大騒ぎしても「買わない」父親、遊んで食べない子どもの食卓を片づける母親)は、統制的関わり尺度が高いことから、質問紙での解答と具体的場面での対応は、関連していると言える。

つまり、質問紙での養育態度調査は、かなり妥当なものではないかと考える。しかし、質問紙という制約はあり、質問紙での養育態度調査を裏づけるための具体場面での対応を聞くには、面接法や実験法を用いる必要がある。

## 4 終わりに

過保護ではないか、過干渉ではないか、あるいは、放任ではないかと様々に非難されている最近の親の養育態度について、受容的子ども中心的関わり尺度、統制的関わり尺度、責任回避的関わり尺度の3次元を用いて、今育児のまっただ中にある幼児を持つ両親307組を対象に調査を行ったところ、次のような結果を得た。

1) 父親も母親も3次元のうち「受容的子ども中心的関わり尺度」が最も高かった。つまり父親母親とも「愛情」でもって子どもに接していた。

2) 統制しすぎていたり、しつけに一貫性がないということとはなかった。

3) 父親より母親の方が、受容的子ども中心的関わり尺度が有意に高かった。

4) 母親では、女兒よりも男児に受容的子ども中心的関わり尺度が有意に高く、男児により愛情を示していた。

5) 父親は一人っ子に受容的子ども中心的関わり尺度が有意に高く、母親は、中間子や末子に統制的関わり尺度が有意に高かった。

6) 具体的な場面では、両親とも受容的な態度をとっているが、どちらかと言えば、困らせられる場面では、父親の方が子どもの心情を受け入れていた。

7) 受容的な対応をする者は、受容的子ども中心的関わり尺度が高かった。母親の方が、自分の方針を貫く統制的関わり傾向が見られた。

以上である。

全体的には、予想以上に適した対応をしていると言える。岡本は<sup>8)</sup>、母親はやや溺愛傾向にあるが、幼稚園児の両親は安定した養育態度を示していると報告している。幼児期の親の養育態度としてかなり信憑性があるのではないかと考えるが、今後さらに地域と対象者を増やして、こうした傾向は一般的なのか否かの検証を進めたい。また、同時に行った社会性の発達や心理的距離との

表4 状況解答別養育態度

		父 親			母 親		
		受容 $\bar{X} \pm sd$	統制 $\bar{X} \pm sd$	責任 $\bar{X} \pm sd$	受容 $\bar{X} \pm sd$	統制 $\bar{X} \pm sd$	責任 $\bar{X} \pm sd$
満員電車の中で駄々こねた時	a「今は	36.26±6.56	28.31±4.75	27.07±5.83	39.95±5.74	30.65±4.77	28.67±5.95
	b「強いから	38.84±4.92	27.31±4.83	23.84±4.64	39.40±4.62	28.40±4.26	23.62±4.17
	c「座りたい	39.41±4.69	27.04±4.73	24.54±5.29	40.96±3.57	27.38±4.22	24.69±4.67
お店で「買って」大騒ぎした時	a「買いませ	38.80±4.64	28.49±4.64	22.84±4.81	39.24±4.08	28.75±4.53	23.92±4.66
	b「他の物で	38.89±4.57	26.44±4.20	25.00±4.16	40.82±4.18	28.30±3.84	25.05±4.49
	c「仕方がない	37.82±6.86	25.54±4.41	28.84±4.15	42.67±4.73	27.88±4.99	29.48±4.97
両手がふさがっているのに「だっこ」と	a「荷物が	38.75±5.08	26.69±4.67	25.22±4.97	39.38±4.44	28.71±4.07	25.64±4.63
	b「荷物を置い	39.56±4.98	27.62±4.78	25.18±5.29	41.83±3.87	27.01±4.40	25.76±4.82
	c「我慢しな	36.94±5.10	28.45±4.95	24.20±5.31	38.90±4.65	30.21±4.34	25.54±5.31
席を立ったりしてご飯を食べない時	a「食べなく	37.95±6.87	29.19±5.65	24.38±5.67	39.75±4.18	28.03±4.60	24.30±5.30
	b「早く	38.79±5.00	27.41±4.59	24.56±5.39	40.10±4.34	28.44±4.16	25.71±4.61
	c「食べたくな	38.02±5.43	27.36±5.24	25.86±6.00	41.50±4.64	25.81±4.28	25.25±4.72

\* P&lt;0.05 \*\* P&lt;0.01 \*\*\* P&lt;0.001

関連等詳しく見ていく作業が残っている。両親（夫婦）間の養育態度の一致・不一致の検討も行う予定である。

具体場面での対応を求める解答肢に、質問紙という欠点があり、どうしても意図が十分に通じない部分を残している。今後、この面を補うために、面接や実験でもって、ダイナミックに捉える方法を考えねばならない。さらに、こうした養育態度は子どもの発達に従いどう変化していくのかについても見ていきたい。

最後に、調査にご協力いただきました3幼稚園の保護者の皆さま並びに調査用紙の配布回収などご協力いただきました幼稚園のスタッフの皆さまに厚くお礼申し上げます。

なお、この研究の一部は、日本家政学会第52回大会並びに日本小児保健学会第47回大会で口頭発表を行った。

## 参考文献

- (1) 総理府：青少年の非行等問題行動に関する世論調査，平成10年度 青少年白書
- (2) 森下正康：幼児期の自己抑制と思いやり・攻撃性，親子関係との関連，日本教育心理学会第41回大会総会発表論文集 1999
- (3) 戸ヶ崎素子・坂野雄二：母親の養育態度が小学生の社会的スキルと学校適応に及ぼす影響，積極的拒否型の養育態度の観点から，教育進学研究，44，156-159，1997

- (4) 小林真：母親のしつけスタイルと幼児の行動特徴，上田女子短期大学紀要，20，1997
- (5) 児童心理学の進歩，1980，金子書房，1980
- (6) 堀洋道他：心理尺度ファイル，垣内出版，1994
- (7) 鈴木眞雄他：子どものパーソナリティ発達に影響を及ぼす養育態度・家族構成・社会的ストレスに関する測定尺度，愛知教育大学研究報告，1985
- (8) 岡本雅子：近年における養育態度に関する一考察，日本保育学会第52回大会研究論文集，1999